



くすい箱

発行

| | |
|----------|--------|
| 桐生厚生総合病院 | 薬剤部 |
| 発行責任者 | 河井 利恵子 |
| 編集担当者 | 児玉 博 |
| | 大手 直樹 |

第61回目のテーマは、「病院薬剤師の業務について」です。

病院の薬剤師といえばどんなイメージがあるでしょうか？あまり接する機会がなくイメージが湧かない方もいらっしゃるかと思います。今回は、当院薬剤師の業務について紹介します。

病院薬剤師の主な業務

近年、病院薬剤師の業務は質・量ともに拡大を続け、下記のようなさまざま業務を行っています。薬を保険調剤薬局で受け取る「医薬分業」が進む以前は、「調剤業務」「注射調剤」業務に携わる人員がほとんどでしたが、現在は「病棟業務」に携わる人員が最多となっています。

※ここに記載している業務内容は病院の規模により異なる場合があります。

• 調剤業務

外来患者さんの薬を調剤する外来調剤と入院患者さんの薬を調剤する入院調剤があり、処方せんの内容を確認し、薬の種類や量を取り揃えたり、薬を量り混ぜ合わせたりしています。また、当院では医師からの依頼のあった糖尿病・骨粗しょう症などで初めて自己注射を行う外来患者さんに対し注射手技の指導を行っています。

• 製剤業務

患者さんの病気の症状によって市販されている医薬品では対応できない場合、薬剤師が薬学的な知識を用いて院内製剤を調製しています。



• 注射調剤

処方せんの内容を確認し、入院患者さんや化学療法を行う患者さん一人一人が使用する注射薬を1回分ずつ調剤しています。

• 注射薬混合調製業務

無菌的な調製が必要な点滴や抗がん薬は、清潔に保たれた専用の部屋で、注射薬を混ぜて調製しています。抗がん薬はとても強い作用があるので、体についたり吸い込んだりしないようにガウンや手袋、マスクなどを着けて行っています。



• 通院治療センター業務

化学療法レジメン（治療の計画書）の確認、化学療法治療の説明や副作用の確認、医師への処方提案などを行い、患者さんが安全で安心して治療ができるように深く関わっています。

• 医薬品情報提供業務

医薬品適正使用の推進を行うために、最新情報の収集・情報の評価を行います。また、病院内で発生した副作用情報の収集を行い、厚生労働省に報告を行います。報告により様々な医療機関が情報を共有することができ、薬をより安全に使用することができます。



・病棟業務

- ・入院された患者さんまたはご家族と面談をし、持参された薬、市販薬、健康食品等の内容、服薬の状況、副作用歴等を確認しています。
- ・疾患や症状、年齢、体格、腎臓や肝臓の機能などを確認し減量または中止したほうが良いと思われる薬があれば医師に提案することもあります。
- ・使用している薬が効いているか、副作用が出ていないか確認をします。退院時には退院後の生活に合わせた薬の使用が継続できるよう、患者さんの相談に応じ薬の説明をしています。



・チーム医療

医師をはじめ医療スタッフは、患者さんに最善の治療を提供するために、いろいろな職種がチームを組み、連携して治療にあたっています。この医療チームの一員として医師や看護師とともに臨床の現場に立ち、効果的な薬物治療を行うために専門領域での最新の知識・技能を持つ認定薬剤師が増えています。当院でも認定薬剤師がチーム医療に貢献しています。

- ・病院感染対策チーム : 感染制御認定薬剤師、抗菌化学療法認定薬剤師
- ・化学療法 : がん薬物療法認定薬剤師
- ・妊婦・授乳婦さんへの薬の指導、母親学級 : 妊婦・授乳婦薬物療法認定薬剤師
- ・栄養サポートチーム : 栄養サポートチーム専門療法士

最後に・・・

薬剤師は、持参される薬、アレルギーや副作用に関する情報を的確に把握し、安全な薬物療法が提供できるようサポートしています。お薬手帳は、患者さんがお話できない緊急時などでも、使用している薬を正確に伝えられスムーズな治療を受けることが出来ます。日頃から下記の点に注意し外出の際は常に持参されることをおすすめします。

- ・何冊ももたずに 1冊にまとめる
- ・貼り忘れずに時系列に記録する
- ・アレルギー・副作用歴(できるだけ正確な薬品名)を記載する
- ・既往歴を記載する



当院の薬剤師は、ワッペンをつけています。
お気軽にお問い合わせください

- 参考資料 -

薬剤師の仕事 病院薬剤師 | くすりの仕事図鑑 | すこやかコンパス | 大日本住友製薬株式会社 (ds-pharma.co.jp)
病院薬剤師の仕事 | 東京都病院薬剤師会 (thpa.or.jp)
病院薬剤師の仕事内容 | ハッピーファーマシスト (smast.co.jp)
日本病院薬剤師会 (ishp.or.jp)

次回は、“潰瘍性大腸炎”をテーマに、2021年12月発行予定です。